いちご新聞

～山元町震災復興 土曜日の会だより～

【第1号】2012年6月1日

発行：山元町震災復興 土曜日の会
住所：宮城県亘理郡山元町
山寺字浜183 普門寺内
発行責任者：砂金 政宏
（土曜日の会会長）
電話：090-1938-5170

～土曜日の会とは？～
山元町の復興を
考える住民の会です

土曜日の会
活動報告

今こそ住民同士の繋がりを

広く住民の意見を吸い上げたい

去る4月28日(土)、普門寺内において第17回、山元町震災復興・土曜日の会が開かれた。参加者は砂金会長をはじめとする土曜日の会のメンバー、普門寺を拠点とする「テラセン」のメンバー、山元町震災復興アドバイザーとして招かれた東北工業大学建築科の先生方、「仙台荒浜地区の再生を願う会」の方々、そして地元の議員さん、山元町の住民の方々など合わせて約20名。午後6時から2時間にわたり、山元町の震災復興について活発な意見交換が行われた。

東北工業大学の方々の出席は、土曜日の会の砂金氏、田代氏の震災復興支援要請を受けてのものだ。先に行われた4月19日の復興支援打ち合わせ会においては、復興まちづくりに向けた東北工大との連携について話し合われた。現在山元町がかえる問題は「震災により住民がバラバラになったことで、コミュニティーが崩れ自治会も機能していないこと」「そのような中で土曜日の会を立ち上げたものの、ハード的にもソフト的にも地域が崩壊した状態で、何をどうしたらよいかわからない状況であること」「町の復興計画が進む中、住民側からの意見を十分に伝えられないことで、計画に対する閉塞感が見られること」…などがあげられた。このような問題をふまえ、土曜日の会としては復興まちづくりに向けた住民組織作りと意思形成についての支援、連携、そして大学の幅広い専門知識と独自の調査を生かしたアドバイスを要請した、という経緯がある。

第20回土曜日の会の模様（普門寺にて）

東北工大の「論点マップ」もとに今後の課題を整理

東北工大客員研究員の菊池氏より、山元町の「現在の状況」「町としての動き」「現状の課題」を踏まえて、地域の復興に向けた『論点マップ』が示された。支援要請のあった「住民の組織作り」「住民意見の集約と合意形成」「地区居住条件の調査」「地区の復興計画立案」「住民の自主復興活動」の5項目を基に、大学として出来る支援を検討していく。山元町の住民はどういう暮らしを求めているのかということをはっきりさせ、山元町全体での生活環境を考慮した計画を具体化させることなど、土曜日の会の担う役割についても言及があった。

『荒浜再生を願う会』（仙台）との情報交換

山元町住民側からは、震災から1年以上が経過し、人口流出に歯止めがきかず震災前の1万7千から、町の発表では1万4千に減少、実質町内に居住している住民は1万を割る勢いであることに危機感を抱いているとの声が聞かれた。また、土曜日の会は花釜、牛橋、笠野などの住民が中心だが、被災地域は新浜、中浜、磯など浜通りの広域にわたっていて、住民同士のまとまりにも欠け連携や組織作りが難しいという問題点も出された。仙台荒浜側からは、地理的にも地区のまとまりも良く、会を立ち上げたものの、現在では移転問題もあり、住み続けたい住民と移転を選ぶ住民とで方向性が分かれている、という現状が報告された。

今後の生活の不安や悩みをなんでも話せる会にしたい

山元町では、家が流されてしまった人は移転や生活再建についての不安や悩みがあり、一部元の住まいに戻ってきている人達は居住環境が悪化しているという悩みを抱えている。このような住民一人ひとりの生活の悩み、問題、要望などの情報をきめ細かく集め、それを再び住民にフィードバックしたり、町側へ伝えていくことなど、土曜日の会のはたす役割は大きい。そのためにも多くの人が土曜日の会に集い、ざっくばらんに話し合ったり、情報を共有することが必要であるというまとめで本日の会は閉会となった。

コラム

JR山下駅の内陸移転は復興を遅らせ、地域を衰退させる

山元町震災復興・土曜日の会

田代 侃　（花釜）

山元町震災復興の混乱と遅れはJR山下駅の内陸移転計画から始まった。JR山下駅の早期復旧開通は全ての町民の願望だ。山元町は仙台の通勤、通学、生活圏だからJRが復旧しない限り住民の生活復興はできない。JRの復旧が遅れるほど住民は困窮し、自衛のために仙台方面へ流出する。山下駅は現地復旧が最も早期開通になることは仙石線等、他の路線の復旧状況を見れば明らかだ。山下駅を内陸移転すれば開通は最低これから5年後になる。「JR常磐線早期開通住民の会」は山下駅現地復旧を求める二千名の署名を集めて、町長への要望と町議会への請願を行った。それでも町長は内陸移転も現地復旧も開通時期は同じだと強弁し、町議会も山下駅の内陸移転を可決してしまった。JR山下駅の周辺は昭和24年に山下駅が開設されて以来、山下駅をよりどころとして浜堤に沿って発展し、町内最大のずば抜けて大きな居住地を形成し、山元町はこの地区の発展に支えられて来た。農業生産においても浜堤の地質を活用して、「仙台いちご」のブランドのもとに町内最大の生産地に成長している。山下駅を内陸移転すれば、山下駅周辺住民の多くは町外へ散逸し、残った住民は生活のよりどころを失う。少子高齢化の時代に一度散逸した人口は戻って来ない。そもそも山下駅は内陸移転の必要がない。海岸防潮堤は海抜7.2mにかさ上げされ、2線堤として県道相馬亘理線が高盛土海抜5mになる。津波シミュレーション結果によれば浜吉田駅から山下駅までは安全が確保されている。この津波シミュレーション結果は非公開でいまだに住民に説明されていない。「今後の住まい個別面談」（対象世帯数2，733、1月23日～2月24日）の結果を見ると町外移転は17%に上る。未定が11%あり、面談率63%であるから今後の町外移転は膨大な数になるだろう。山下駅の内陸移転のため復旧が遅れるほど町外移転は増加する。

バックストーリー花釜

～住民の声インタビュー①～

渡邊 貞子さん（現・ナガワ仮設）

山下駅前橋元商店の西側、駅前道路からちょっと入った藤棚のある家が渡邊貞子さんのお宅だ。毎年桜が終った頃、紫のシャンデリアのようなみごとな藤の花は、表通りからもよく見え、近所の方や保育所の子ども達も花見に来るほどだった。震災後も塩水に負けず、みごとな花を咲かせていた。現在貞子さんは夫の博喜さんと2人で大平ナガワ仮設にいるが、長年住み慣れたこの場所にもどるつもりでいる。家は津波で浸水したものの長屋は残り、家の前の畑には作物も実るようになった。自宅は取り壊し、土盛りをした状態。しかし、震災前同居していた娘さん夫婦は戻りたくないということで、貞子さん達老夫婦が住める小さな家を建てるつもりだ。娘さん夫婦もこの場所に想いはあるが、夜になれば暗く、隣組だった家も歯が抜けたようにまばらで店もなく心細い。親のことは心配だが戻る気にはなれずにいる。将来に不安をかかえる貞子さんの表情は暗かった。

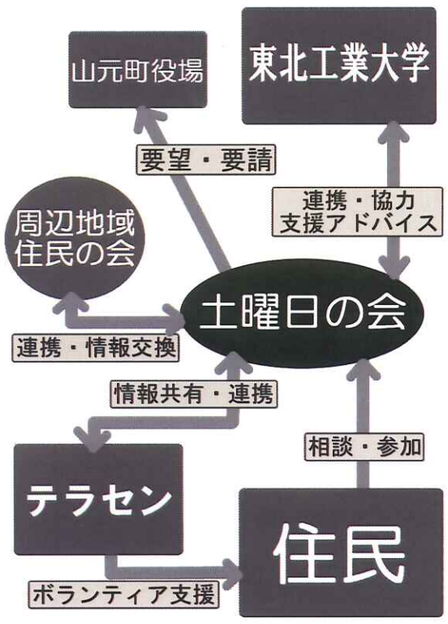
震災前と変わらぬ、見事な藤棚

お知らせ

いちご新聞創刊

復興を考える「住民の会」

震災から9ヵ月たったクリスマスも近いある日、普門寺に4人の山元町住民が集まっていた。普門寺住職の坂野和尚、テラセン代表の藤本さん、そのテラセンに自宅のガレキ撤去の支援を受けていた砂金さんと小野さんだった。話題は「山元町はどうなっていくのだろう」「このままでいいのか」…4人は、秋頃仙台荒浜の住民の会について知り、山元町にも住民の会の必要性を感じていた。「山元町にも住民の会を作ろう！」これが土曜日の会のスタートとなった。



それから毎週土曜日の夜に集まり、現在まで20回を数える会を持ってきた。まず取りかかった津波被災地域における住民の居住意向調査は今年5月にほぼまとまった。もとの住まいに戻ってきたいと考える住民がどれくらいいるのか、生活環境やコミニティーをどうやって再生していくのかなど、現状把握には欠かせない調査だ。土曜日の会の会長砂金政宏さんは、これから土曜日の会を身近な情報交換など、住民が気軽に集まり、山元町のこれからについて前向きな話し合いのできる会にしていきたいと語る。また、この「いちご新聞」も「りんごラジオ」に続くような住民の声を反映した新聞にしていけたら…と期待をよせている。

仙台荒浜　現地再建を目指すユニークな取り組み

仙台荒浜地区は住宅地の大半が災害危険区域に指定され、防災集団移転促進事業の対象となった。宮城県では仙台市や山元町などで、はじめに自治体が危険区域を指定した上で、移転希望世帯の土地を移転促進区域に設定する「災害危険区域先行型」の手法で進めている。

仙台荒浜地区は、漁業や農業によって培われた豊かな自然環境に恵まれ、仙台市で唯一の海水浴場があるなど地域資源に富んでいた。長い年月をかけて、総合的な住まいの環境を育んできた地域である。そのような地元での暮らしを、代えがたいものと考える住民が中心となり昨年12月に「荒浜再生を願う会を」結成。東北工業大学建築学科新井研究室、NPO法人まちの縁側育くみ隊などがその支援に当たっている。現在は、その土地に住んできた住民の意向を大切に受け止めるという理解のもと、日本国内に加え広く海外からも支援の声が寄せられている。

これまでに、地区での活動を発信する「荒浜新聞」の発行、自らが目指す場所で再建への想いを表す「希望の黄色いハンカチ作戦」などを実施。また、5月には地元住民、学識経験者、NPOなどが参加して、活動の今後の方向性を話し合う「荒浜フォーラム」を開催した。今後は、さらに支援者を拡大しながら仙台市との対話を続け、住民側から安心して暮らせる荒浜の将来像を提案していくことにしている。

（東北工業大学　建築学科講師：新井信幸）

おてら災害ボランティアセンター

テラセン活動報告その①

連休明けののどかな昼下がり。昨日の嵐が嘘のような穏やかな風に吹かれ、普門寺の文俊和尚はいつものようにテラセン事務所のドアを開けた。さて、昼飯でも食べようかと腰を下ろした文俊和尚。しかし昼休憩の時間になっても、一向にテラセンメンバーが戻って来ない。不思議に思い辺りを見回すと、チェーンソーが無い。さらにはトランシーバー等の装備類も一つ残らず無い。これは一体どうした事かと、首を傾げる文俊和尚の目に、一枚の書き置きが飛び込んで来た。「つくば市へ向かいます。」

テラセン一向、竜巻被災地茨城県つくば市へ向け出発

5月7日(月)、テラセン代表藤本さんはメンバーらと共に資材を積み込み、昼前に2tダンプと軽トラックで、竜巻被害の出た茨城県つくば市へと出発。途中、車両トラブルに見舞われた為、夕方になって現地に到着。既に現地で活動を開始していた他のボランティア団体と合流し、貴重品の捜索や被害状況の確認などの活動に入った。

翌日からは文俊和尚も現地合流し、被害の大きかった北条地区へ入り、つぶれた倉庫の解体、がれきや瓦の撤去、荷物の運び出し、屋根のシート貼り等、他団体と連携しながら現場の復旧作業に当たった。今後は山元町での活動と共に、現地つくば市との連絡を取りながら復旧支援活動を継続して行くとのことである。

（NPO法人ドリーム・ゲート／ブログより一部抜粋）

普門寺本堂とテラセン事務所

編集後記

「土曜日の会…って何？」「どんなこと　してるの？」つい先日まで土曜日の会の存在すら知らなかった私が、新聞編集にかかわることになり…その責任の重さに多少ビビってしまっていましたが、いやいや土曜日の会はそんな難しい集まりではないのです。「山元町震災復興」というとおおげさですが、簡単に言うと「これからの山元町での生活について、みんなで考えていく会」というのが、土曜日の会なのです。身近なことから記事にしつつ、土曜日の会の今を伝える新聞にしていきたいと考えています。やっと、土曜日の会新聞第1号ができました。また第2号へ向けてがんばるぞ！（内山）

気い使わねで来てけさいん！

山元町震災復興

土曜日の会

毎週 土曜日
18：00～